

マニラ戦線にて

兵庫県 古屋 信 夫

私は農家の長男に生まれました。当時の家族は、父・興平、母・あき、姉一人、妹四人の八人家族で、農業として耕地は田五反歩と畑を二反歩ほどで米、麦、野菜作りのほか農耕牛一頭に搾乳用に山羊一頭、外に養蚕業を春秋二回行ってました。家は伊由谷川の上流の集落に在り、我が町役場と駅までは一里ほどあり、小学校も朝来郡中川村の尋常高等小学校に歩いて通学しました。小学校を卒業して県立農蚕学校に入学し、卒業後、兵庫農村講習所に入所、昭和十六（一九四一）年十二月卒業しました。繰り上げ卒業となりましたので卒業後は農協の技術員として神崎町の農業会に勤務することになりました。

そして昭和十八年十二月まで勤務しましたが、十月には徴兵検査を和田山町の小学校で受け、甲

種合格になりました。そして昭和十九年二月十日に姫路の中部第四十六部隊に入営しました。満州要員でしたので満州の本隊から迎えの引率者が来て、二月十五日に姫路の第四十六部隊を出発、姫路駅より列車で下関へ、関釜連絡船で、釜山に到着しました。

玄界灘は大変な荒れ様で、船酔い者が続出し、ほとんど食事する者もいなかったほどでした。釜山から列車に乗ると達しが出ました。素手で鉄のパイプ等には触らないようにと云われました。これは寒さのために手の皮が鉄にくっついて皮が取れなくなるほど寒さが厳しいと云うことを覚えていきます。これから行く満州の厳しい寒さをひしひしと感じながら進んで行きました。

満州三江省佳木斯の第六百四十六部隊に到着と同時に、第二大隊の第五中隊に編成され、ここで初年教育を受け、第一期の検閲は五月末日でした。

それからソ満国境の富錦の警備と陣地構築に向かいました。その間演習を兼ねて完全軍装で五十

キロほどの徒步行軍では、落伍者は出るし、足に豆は出来るし、重装備のため苦勞しました。特にガスマスクの着用しての行軍は大変で、正に実戦そのものでした。

到着してからは壕の整備、構築に従事し、夜間はソ連軍側がモールス通信しているのが聞こえました。また我が方も外で将校集合ラッパが度々鳴り、何かあると思っていました。これは南方の戦況の連絡らしかったのですが、兵隊には分かりません。噂ではラバウルの仇打ちに行くのだとか話していました。

約二カ月間ここにしまして、八月上旬に本隊復帰で佳木斯へ帰ることになり、その時は船で松花江を下り、一日で佳木斯に帰ることが出来ました。

本隊に帰って見ると、既に出勤準備が出来ていて、私達も急遽準備をしました。衣服は夏物の新調で、我々は南方戦線に行くのだと感じました。

八月、本隊に出勤命令下命され、鉄第五四四六部隊として佳木斯を出発、釜山港へ向かいました。

釜山を出港して鹿児島港に避難して夜出港、島陰に避難しながら南下しました。南へ南へ下るにつれて敵の潜水艦をよけながら基隆港に入港しました。上陸して台北市に駐屯し、新竹の近くに陣地を構築するとの下命がありました。台湾駐屯中、基隆の金化石鉱山（シンガポールでの英国捕虜を護送したこともあり）ました。捕虜たちはグラマン機が来ると、宿舎の窓を開けて手を振り身を乗り出して、自分たちを迎えに来たと云って騒ぎ立てたこともありました。

新竹州の海岸では、洞穴掘りや戦車が落ちて上がれないような大きな溝を掘ったこともありました。やがて高雄を出航してマニラ港に着いたのは十二月でした。上陸物資の荷揚げです。

我々第三小隊だけはリングエン湾からバターン半島への物資輸送の護衛に当りました。この第三十九連隊（鉄第五四四部隊）の戦史は、兵庫県の産経新聞に連載されました。私は当時の記録を残していますが、「平和の礎」にも詳細に記されてい

ます。第二大隊第五中隊の戦史は今亡き指揮班長であった稲垣練治さんの出されたものがあります。

荷揚げをしていた時、第五中隊の自分達の輸送警備をしていた兵隊がグラマンの襲撃を受け、一人が左足が切れて無くなっていました。

この時トラックも三台ほど焼け、バランガで車を降りて決勝台に小屋造りをしました。その時米軍がデナルビアーに上陸したので我々はナチブ山に立て籠ることになりました。第一回目の戦闘では、初めて黒人部隊に遭遇しました。体は大きく黒鬼が来たと思えました。歯と口と手の平も白くて、後はすべて真黒で、しかも勇敢でした。その兵隊たちも、いつの間にか引き上げて事無く済みました。

しかしそれから山の奥へ奥へと進みましたが疲労とマラリアに罹り、食糧も減り、自給自足となりました。ナチブの奥に本部が在り、そこで元気な者は午後五時過ぎになると米兵が引き上げるの

出会いました。そこで本部も攻撃されていることが分かりました。探し回っている内に稲垣班長と出会いました。稲垣班長も左手を負傷していましたが自分達の部屋まで来てくれて、共に死亡者六人を一カ所に埋葬しました。

飢餓のため下山し焼かれた小屋の中から二斗ほどの米を調達して本部へ渡しました。自分は一人で本部へ上がり、第三分隊長の福井班長と連れだつて下山しました。この頃より米軍による襲撃は少なくなりました。また調達できる食糧も少なくなり、広い場所を回らないと量が集まらないようになりました。

敵機によるビラの投下が始まり、いろいろのビラを落して行くようになりました。「日本は負けた早く出て来い」とか「日本は無条件降伏をした」とかのビラです、拾って読んでも信じられませんでしたが、その後、「日本兵はすぐ山を下り出て来よう」と云うようなビラになりました。

そのうち自分の横にいたマラリアで寝ていた戦

を待つて、下山しては稲粒や食糧になる物を取つて朝には山に帰つて来る。その調達物を背負つて帰るのですが、下の田畑は住民が銃を持つて護るようになり、どうすることも出来なくなりました。

そして雨期に入り、衛生状態も悪く、疲れとマラリア熱で戦友たちが次々と亡くなっていきます。山の上の本部では毎日調達物を運ぶのにも疲労がひどくなり、そのため中継地点を作り、いったんそこで集積した物をさらに上に揚げるようにしました。

やがて雨期も上がり、元気な者は働くことが出来るようになりました。糧秣は芋の葉っぱなどが出来た頃、米軍はすでに自分達の中継所を知つたのか、ある雨の日に、疲れ果てた七人が小屋の中で眠りに入ったところを襲撃され、六人が死亡、自分だけが残りました。

本部まで、このことを報告に行く途中で、マンガーの木の下で我々を襲つた米兵が昼食中でした。この残飯を我が軍医殿鈴木さんが食べていたのに

友が、動かないのに気が付いて見ますと、既に死んでいました。何日も経っていたのか戦友のまぶたの辺りや乳の黒い辺りを蟻がかじつてせつせと運んでいるのを見て、自分も最後はあのようになるかも知れぬと思いました。

その時班長殿より戦争は終わったと知らされ、九月三日には下山して行くよう、本部からも達しがありました。これまで最後の一兵になつても戦うと誓つたのが悔しくてなりませんでしたが、下山することにしました。軍用道路に出て武装解除された時に、元気な者は米兵よりタバコを貰い吸っていました。全員が一カ所に收容されましたが、自分はマラリアで野戦病院に入院することになりました。一カ月ほどで退院、PWの作業隊に入り、労働に就きました。

昭和二十一年十一月、復員が出来るとのことで、月末にマニラ港に送られました。汽車（無蓋車）が市内を通過中に徐行した時、ゴミや残飯を投げ入れられましたが、その時は護衛兵が拳銃を向け

るとこの嫌がらせは止まりました。

そしてマニラ港を出発、バターン半島を横に見ながら亡き戦友に冥福を祈りつつ別れを告げました。バシー海峡では波が高く船酔いが激しく食事も二日間は出来ませんでした。

十二月二十日、名古屋港に上陸、しらみ退治のためDDTを頭からかけられました。翌二十一日の朝汽車待ちをしていた時に、南海大地震に遭い津波もきて、ホームに立っていた自分達も足脛まで漬りました。

このようなことで汽車も遅れましたが、夕方ようやく姫路駅に着きました。そして九時頃に青倉駅に到着、家まで三キロの道を歩いて帰ることが出来ました。

二年振りの帰郷で、家族の者と無事対面も出来、父母や姉妹も元気で、大変喜んでくれましたが、心の奥深くにはいつも亡き戦友のことが思い出され、冥福を祈っています。昭和二十八年には母親を亡くして、また最近父親も亡くしました。今で

も戦友のことを思い出すごとに戦争の悲惨さを思い、永遠の平和を願わずにはいられません。